

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
大学院学生研究
2017年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 現代心理学研究科 映像身体学専攻		
研究代表者 (2018年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程2年	早川 由真 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	現代心理学部・映像身体学科・教授	中村 秀之 印	
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	プロダクション・コード撤廃直後のアメリカ映画における画面上の身体についての研究		
研究組織 (研究代表者・共同研究者) ※2018年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	現代心理学研究科・映像身体学専攻・博士課程後期課程2年	早川 由真	
研究期間	2017 年度		
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究はプロダクション・コード撤廃直後(1960年代末~70年代頃)のアメリカ映画を対象とし、画面上の身体イメージを個別具体的に分析することで、画面上の身体というものの特異な在り方を解明する試みである。とりわけ、同時期を対象とする従来の議論では軽視されてきた俳優演出や演技の問題をも踏まえつつ、主にリチャード・フライシャー監督作品(『絞殺魔』および『10番街の殺人』)における画面上の身体の特異な在り方を明らかにした。同時に、テキストの分析にあたって、画面上の身体を原理的に規定している諸要素についての理論的検討もおこなった。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[プロダクション・コード] [アメリカ映画] [画面上の身体]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の大きな目的は、現実にある身体ではなく、舞台上にある身体でもなく、映画において画面上に映しだされる身体とはどのような存在なのだろうか、という問いを明らかにすることである。映画における画面上の身体の問題にかんしては、19世紀末に映画が誕生して以来、様々な議論がなされてきた。たとえばヴァルター・ベンヤミンやスタンリー・カヴェルのテキストは、画面上の身体の在り方を周囲の諸物体との関係において問題にしたものだと言える[注1]。しかし、画面上の身体は、俳優のイメージや役柄の像、およびキャラクターとしての機能、あるいは個々のショットにおけるフレーミングやモンタージュ、俳優演出や演技など、より多様で複雑な要素によって規定される存在であるはずだ。

そこで私は、1960年代末のプロダクション・コード撤廃の渦中におけるアメリカ映画に着目した。コード修正、撤廃という動きのなか、アメリカ映画においては、以前抑制されていた性的・暴力的身体イメージが次々と可視化されていったという歴史がある。だが、あくまでこれらの身体イメージは、性や暴力という一般的な表象の問題として扱われてきた傾向があり、上記のような多角的な観点からの議論が手薄であった。そこで私はまず、リチャード・フライシャー監督の『絞殺魔』(The Boston Strangler, 1968年)を対象に、性的・暴力的イメージの可視化にとどまらない新たな視点を提示することを試みた。というのも、後述するように、この作品におけるデサルヴォという存在には、先行研究では指摘されていない、画面上の身体としての特異な在り方を見いだせるからだ。

この作品についての研究を進めていくうちに、徐々に視覚的な身体イメージと音(声)との分裂的な関係への関心が高まっていった。トーキー映画において画面上の身体は、視覚的な身体イメージと声とが結びつくことで有機的な統一体を保っているとされるが[注2]、そのような身体はあくまで構築されたものにすぎず、むしろ潜在的に分裂する危うさを孕んでいるのではないか。そこで、さらなる探究として、画面上の身体にとっての生命とは何か、という問いを切り口に、声から逃れていくような存在としての呼吸音に着目し、具体的なテキスト分析を通じて、視覚的な身体イメージと声の関係について考察していった。以下、上記2つの研究についての概略と成果を記す。

[注1] ヴァルター・ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」久保哲司訳、浅井健二郎編訳『ベンヤミン・コレクション①近代の意味』ちくま学芸文庫、1995年、604-11頁。および、スタンリー・カヴェル『眼に映る世界—映画の存在論についての考察』石原陽一郎訳、法政大学出版局、2012年、70頁。

[注2] メアリ・アン・ドーンは、映画においてはトーキーとともに出現した声によって「幻想的身体」が再構築され、「有機的に統一された」身体が表象されるようになり、「台詞を特定の個人に帰する」ことができるようになったと指摘する。メアリ・アン・ドーン「映画における声—身体と空間の分節」松田英男訳、岩本憲児・武田潔・斎藤綾子編『新 映画理論集成②—知覚/表象/読解』フィルムアート社、1999年、312-3頁。

『絞殺魔』におけるカーティス/デサルヴォの身体にかんする研究

この研究では『絞殺魔』に登場する、トニー・カーティス演じるアルバート・デサルヴォという存在に着目し、これまでの研究では指摘されてこなかった、画面上の身体としての在り方の特異性を指摘した。1962年から1964年にかけて実際にボストンで発生した連続強姦殺人事件を描いたノンフィクション小説[注2]を原作とするこの映画において、実在する容疑者と同名のデサルヴォは、捜査の果てに、11人の女性を殺害した容疑をかけられ逮捕されてしまう。だが医師の診断によれば、彼は2つの人格に「分裂」しており、犯罪を行ったのは第2の人格であって、通常時の彼(第1の人格)には犯行当時の記憶がないという。精神病的な観点からこの作品を論じた先行研究[注3]は、デサルヴォが〈第2の人格が真犯人である分裂した存在〉であることを前提にしている。

しかし、デサルヴォという存在には、それを前提として理解できない部分があるのだ。そこでこの研究では、それを前提とはせず、画面上の身体の問題としてデサルヴォという存在を扱い、その在り方の特異性を検証した。そのための手掛かりとして、ステューヴン・ヒースによる、物語映画における「人々の存在[the presence of people]」の分類、すなわち「人物[person]」、「イメージ[image]」、「像[figure]」、「動作主[agent]」、「キャラクター[character]」を仮設的枠組みとして用いつつ、テキスト内外の諸要素を多角的な観点から分析し、それぞれの項目にはうまく収まらないデサルヴォの在り方の特異性を明らかにした[注4]。

まず、テキスト外部におけるカーティスのスター・イメージ、およびメディア言説におけるデサルヴォ像との関連により、デサルヴォという存在が「イメージ[image]」や「像[figure]」の項目から逸脱していることを示した。そのうえで、テキスト内部の具体的な分析を通じて「動作主[agent]」と「キャラクター[character]」の項目を検証し、デサルヴォがこれらの項目にも収まらないことを示した。その過程で、この映画が、不可視の体制、可視化の暴力、別の不可視の領域という3つの段階をたどっていく身体を描いていることが明らかになった。3つの段階は以下のようにたどられる。まず前半部において、犯行の動作主は不可視のままにとどめられ、画面上に全身を現さずに匿名性を維持している。後半部に入ると、デサルヴォこそが絞殺魔であると観客に信じさせるプロセスによって、不可視であったはずの犯行の動作主はデサルヴォの身体と同一視されていく。(→)

研究成果の概要 つづき

(→)だが、そのプロセス自体の綻びは、デサルヴォの犯行現場の識別不可能性、さらに〈声〉の身体化の不可能性として、テキスト内にあらかじめ埋め込まれてもいたのだ[注5]。つまりデサルヴォは、不可視の動作主ではありえず、絞殺魔というキャラクターであるともいえない。にもかかわらず、彼はボトムリー（ヘンリー・フォンダ）の尋問によって、声をイメージに従わせることで、一連の犯行を担う個別化した主体として仕立て上げられる。そこには可視化の暴力のメカニズムが働いている。そして、尋問の末にデサルヴォは、匿名的な不可視の身体とは異なる、別の不可視の領域に至る。デサルヴォは、可視的な身体に徹することによって、不可視のものを身振りにおいて引き受けるのである。その身体は、この3つの段階をたどったのちに、最終的にスクリーンそのものの特性である〈白の存在〉を示すにまで至る。ここにおいて、この無名の身体は、画面上の身体という存在を規定する原理をも示していることが明らかになった。

上記の内容については、日本映像学会第43回大会で発表したものを論文化し、『映像学』第99号に掲載された。

[注3] ジェロルド・フランク『絞殺---ボストンを襲った狂気』大庭忠男訳、ハヤカワ文庫、1979年。(Gerold Frank, *The Boston Strangler* (New York: New American Library, 1966).)

[注4] たとえば、Vivian C. Sobchack, "No Lies: Direct Cinema as Rape," *Journal of the University Film Association* 29, no.4 (Fall 1977): 14.

[注5] Stephen Heath, "Body, Voice," in *Questions of Cinema* (London: Macmillan, 1981), 178-84.

[注6] 〈声〉の身体化の不可能性については、おもにミシェル・シオンの議論を参照した。Michel Chion, *The Voice in Cinema*, trans. Claudia Gorbman (New York: Columbia UP, 1999), 140.

【『10番街の殺人』を中心とする画面上の身体の呼吸にかんする研究】

この研究では、数々の映画作品において命を落としてしまう役を演じてきた俳優ジョン・ハートの身体イメージに着目し、画面上の身体にとって生命とは何かという問いへのアプローチを試みた。まず80年代半ばまでの出演作を分析し、重力と戯れるかのようなその独特の身体性を指摘しつつ、『エイリアン』に表れている呼吸器系の問題への言及を皮切りに、彼の演じてきた役柄における呼吸の主題を浮かびあがらせた。では、画面上の身体にとって呼吸とはなんだろうか。そこで着目したのが、呼吸の音である。そもそもトーキー映画において、画面上の身体は映像（視覚的な身体イメージ）と音（声）に分裂している存在であり、それらを繋ぎとめているのはリップシンクである。ミシェル・シオンによれば、その統合によって声は身体の「死すべき運命」にしたがうことになる[注7]。だが、そうした声の身体イメージへの帰属の仕方とは異なり、呼吸音は身体イメージに曖昧にしか帰属せず、身体を「暗示」するだけだ[注8]。したがって、呼吸音に着目することで、「死すべき運命」とは異なる画面上の身体の在り方に迫ることができるのではないか[注9]。この仮説を検証するため、ハート初期の代表作といえるリチャード・フライシャー監督『10番街の殺人』(*10 Rillington Place*, 1971年)に表れている独特の呼吸音の分析をおこなった。

撮影地イギリスの録音技術を駆使した繊細な音声[注10]が特徴的な本作には、呼吸の主題が明確に表れている。ガスやロープを用いて女性たちの息を奪ってしまうジョン・クリスティ（リチャード・アッテンボロー）は、その息混じりの喋り方によって、呼吸を自らの身体に強く結びつけた存在として描かれる。一方、被害者ベリル（ジュディ・ギーソン）やティモシー・エヴァンズ（ジョン・ハート）のアフレコによる呼吸音は、あくまで身体の「暗示」にとどまるものとして示される。妻の遺体を階下に運ぶシーンでは、息混じりに喋るクリスティに帰属する呼吸音が聞こえるのと同時に、エヴァンズに明確に帰属しない不気味な呼吸音が響いている。どの身体にも帰属しない音として彷徨うこの呼吸音は、「死すべき運命」をもつ有機的な身体を統合しようとする声から逃れていくノイズのようなものである。この分析によって、有機的に統合された画面上の身体からすり抜けてしまうような呼吸音の在り方が明らかになった。

この研究については、日本映像学会2017年度第2回（通算第17回）映像テキスト分析研究会で発表した。

[注7] Michel Chion, *The Voice in Cinema*, trans. Claudia Gorbman (New York: Columbia UP, 1999), 25-6.

[注8] Chion, 53.

[注9] 『スターウォーズ』(1977年)におけるダース・ベイダーの呼吸音が画面上の身体イメージに帰属することを明瞭に示すことでその「死すべき運命」を強調している点について、画面上の身体にとっての呼吸という問題を論じた以下の著作を参照した。Davina Quinlivan, *The Place of Breath in Cinema* (Edinburgh: Edinburgh UP, 2012), 6.

[注10] 1960年代から70年代初頭にかけてのイギリスにおける録音技術の特異性については、以下のジェイ・ベックによる研究を参照した。Jay Beck, *Designing Sound: Audiovisual Aesthetics in 1970s American Cinema* (New Brunswick, NJ: Rutgers UP, 2016), 16.

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (1 件)

(1) 早川由真「白の存在--リチャード・フライシャー『絞殺魔』におけるカーティス/デサルヴォの身体」『映像学』第 99 号、2018 年、5-24 頁。(査読あり、単独論文)

② 図書 (0 件)

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (0 件)

④ その他 (1 件、学会における口頭研究発表)

(1) 早川由真「ジョン・ハートの受難--『10 番街の殺人』の分析を中心に」、日本映像学会 2017 年度第 2 回 (通算第 17 回) 映像テキスト分析研究会、早稲田大学、2018 年 1 月 20 日。(単独発表)